

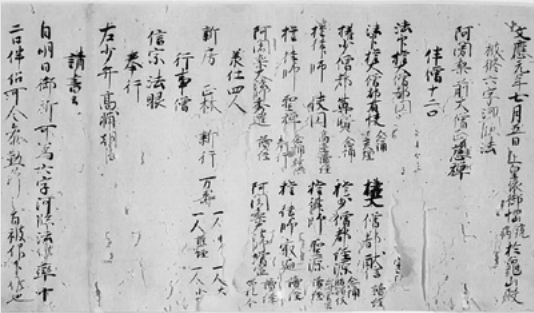
記録された密教修法 「六字河臨法記」

斎木涼子（当館学芸部研究員）

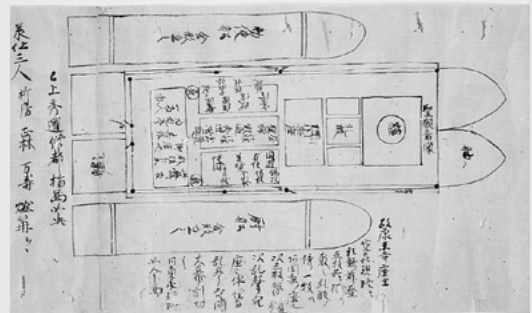
密教修法は、空海以降本格的に日本で実修され、国家安泰の祈りや様々な個人の要求に応えていった。特に十一世紀後半以降、上皇などの権力者が修法に強い関心を寄せ、如意宝珠を用いた修法など、それまでに無い新たなものが創り出されるといって爛熟期を迎える。

しかし修法というのは非常に複雑で、実際にどのような像や法具が用いられ、何が行われたのか、具体的な目的は何だったのかを、私たちが理解するのは簡単なことではない。その際、理解の手助けになるのが、実際に行われた修法の様子を記録、編集した資料である。

ここに紹介するのは、六字河臨法という修法の記録「六字河臨法記」（鎌倉時代・十四世紀、当館蔵）である。「六字神呪経」「請観音経」という經典に基づいて行われる六字経法という修法があるが、六字河臨法はその変形バージョンとも言える修法である。通常



の六字経法は調伏・息災などを目的に、六字曼陀羅もしくは聖観音などを本尊とし（目的・流派により違う）、護摩壇を設け、誦経や護摩のあと天狐・地狐・人の形を焼く、というものである。これだけでも興味深い修法だが、さらに六字河臨法になると、修法の最終日に川に浮かべた船の上で修法を行うという。そして神祇祭祀で用いられる中臣祓を読み、七つの瀬で祓をして三種の形を川に流すという、かなり不思議な要素をもっている。

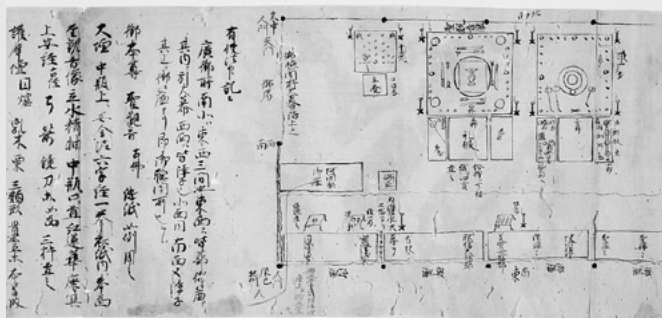


「六字河臨法記」は、文応元年（一二六〇）に後醍醐天皇の病氣平癒のため行われた際の諸記録や文書をまとめたもので、準備のための手紙の遣り取りや参加者、道具や道場の様子が詳細に記される。これによって、二艘並べた船に板を渡し屋根を付け修法の場とした事、見物の船があつた事、棧敷にいた上皇の身に祓の儀式がなされた事、修法を執り行う僧侶の作法などを知ることが出来る。

本来秘密にされるべきであろう、こうした詳細な実施記録は、なぜ残されたのであろうか。もちろん、我々のような人間が修法内容を理解しやすいように、ではない。十二世紀後半以降、真言・天台とも盛んに独自の、また新たな修法を行っ

ていったが、両宗を通じて行われる修法も多くあった。またこの頃には、宗内にも多くの流派が成立していた。そこで他の宗、他の流派との差異を際立たせるために、自流の独自性、優れている点を明確にする必要があつたと考えられる。

そこでこの頃から、大量の修法記録や口伝、またそれを編集した書物が遺されるようになる。実は六字河臨法も、天台山門派のみが行うもので、寺門派・真言宗には存在しない（通常の六字経法しか行わない）ことが述べられる。水に浮かぶ道場、神祇祭祀で読まれる中臣祓、菅拔（夏越の祓で用いる輪・茅輪）、陰陽道の七瀬祓に酷似した河での祓など、今までの修法に無い所作は、まさに新奇性・独自性を示す要素である。当時の貴族たちの眼にも、さぞ魅力的に映ったに違いない。



こうして遺された多くの修法記録や口伝は、当時の僧侶らにとつて重要な資料となつたであろう。そして現代の我々にとつても、奥深い密教修法の実態を知る、貴重な手掛りとなるのである。なお、本巻は当年三月、藤本孝二氏より当館に寄贈されたものである。